

タイポグラフィが成立する場所は「すでにある出来合いの文字」と「すでにある出来合いの組版システム（ハードウェア・ソフトウェア）」、さらに「すでにある出来合いの組版規則」の組み合わせのなかにのみ存在する——こう府川充男さんは『組版原論』一九六六（芸工大図書館請求番号749.44=F5）のなかで指摘しています。

ここでいう「すでにある出来合いの組版規則」とはどういうことでしょうか。組版規則には、辞書や字典などと同様に、規範的（normative）な立場と記述的（descriptive）な立場とがあります。

前回の授業で「かつこうが悪い」「体裁がよくない」というだけでは《組版の論理》としては不十分であることを学びました。私たちは組版規則をどう考え、どう扱っていけばよいのでしょうか。

前期〈組版・タイポグラフィ論〉第6回 20170513

組版規則 規範と記述

前田年昭 t-mae@kobe-du.ac.jp

参考文献
沖森卓也ほか『図解日本の文字』三省堂、二〇一一 0116769D / 0116770H 811||ZUK
逆井克己『基本日本語文字組版』日本印刷新聞社、一九九九 0097062A / 0116795C 749.42||SAK

※本稿（第7回、第8回）をまとめるにあたって丸山邦朋さんにご協力を得た。

う。「苦勞する」とは考えることだ。

組版ルールを学ぶときに、権威主義におちいつてしまつたらとうてい組版の力をつけることはできない。ステレオタイプとは、私たちが日頃抱えている単純化され固定化された態度や意見、イメージのことだ。ステレオタイプとは活版印刷の工程において鋳型からつくられる鉛版（ステロ版）を指すことばであつたが、ひとつの鋳型から同一の鉛版が多数鋳造されるところから、型にはまった発想、考え方をさすようになったのだ。

組版には人もコンピュータやソフトウェアも必要だが、コンピュータやソフトウェアは人が使うもので、人の要素が第一である。人の要素を鍛えるには、よい関連書を読んだり、歴史を学ぶことも大切だが、実際の組版の仕事について「苦勞する」ことがいרבんよい、と思

かつて私は、逆井克己さんが書かれた『基本日本語文字組版』日本印刷新聞社を推薦して、次のように書きました。

最初に、規範的（normative）な立場と記述的（descriptive）な立場とがあると指摘しました。組版のアプリケーションソフトのマニュアルに書いてあること、規格やさまざまなルールブックに書いてあることを金科玉条のごとく守ろうとしても、組版の設計も施工もけつしてうまくいきません。なぜそのルールでいくのか、自分の頭で考えることです。

それは、豊富な歴史の実例に学ぶことです。先人が残したひとつひとつの組み方の実例をみて、なぜ、そういうルールにしたのかを読み取ることです。

組版設計の力はどうしたら身につけることができるのでしょうか。

時と場、印刷物の種類と目的に応じて臨機応変に組版ルールを考えられる力をつけよう

和文組版は文字を均等に並べるといった特徴をもつ

結論からいうと、和文組版は、文字を均等に並べて行をかたまつくり、同じ長さの行を均等にならべて版面をつくるという特徴をもちます。

先に紹介した『DTP&印刷スーパーしくみ事典2012』ワークスコーポレーションは、「文字の並べ方は、工業生産的に均等と不均等の2種類しかない。そして日本では明治期に「均等に並べる」ことを生産システムの前提に選んだのだ。それ以降、この前提の中で、組むための文字、組む技術、組まれた文字を読む慣習が作られてきた」と指摘し、「日本語を組む者は、好むと好まざるに関わらず、この生産システムに分かちがたく置かれているのである。」と結論づけています。

組版の習慣も言葉の習慣と
もに変わっていく

先に紹介した『DTP&印刷スーパーしくみ事典2012』ワークスコーポレーションは、次の例を挙げて、習慣というこ

とについて考えさせてくれています。
これを見ると習慣にも強いものと弱いものがあり
そうですね。

「君、ちよーどいい
か開けてるんだ。
「おや、こんなとこ
とにかく何か食事
「もちろんできると
るじゃないか」

小学校の国語教科書では、会話文に他では見られない独特な字下げがされている。今後これが言葉の組み方として広く新しい慣習になっていくのだから

ひとつ、来年、考えてやろう。そう思いました
→。今年は考える気がしなかつたのです。そして
→、来年、花がさいたら、そのときじっくり考え
ようと思ひました。毎年そう考えて、もう十何
年もたち、来年もまた、来年になつたら考えて

私たちは句読点が行頭にあると違和感を感じる。
組まれた言葉の慣習から大きく外れているからだ

連続する半角約物の組み方は、ひとつのお手本だけではない

最初のもものは「」で2字分、次のものは「」で2字分、三つめのは「」で1・5字分です。

新聞はほとんどが最初の組み方です。個々の調整よりも縦横の格子状の揃えを優先させた組み方で、その結果、調整する箇所は大幅に減ります（前回学んだように、禁則対象文字を最少のセットに設定した場合でもやはり調整は生じますし、なくなりしませんが）。
小説などの本は大半が3つめの組み方ですが、2のような組み方もあります（たとえば、創作元推理文庫やハヤカワ文庫など）。2つめの組み方には3つめの組み方に比べて、「新聞風、であるともいえます。紙面から受ける印象のちがいを感じ取ってください。

緒上医院の待合い室に上がった僕の第一印象はそれだった。普通、病院というと消毒液の匂いとくろくろの匂いがあつて、それを嗅ぐといかにも病人らしい気分になる。たかが鼻、風邪でも、頭を垂れてひたすら呼ばれるのを待つといったしおらしい心持ちになるもんだが。
「革」の匂いだ。それが一番近い。
小さい頃、親父にハヤヤリに乗っけてもらった。生まれて初めて乗るハヤヤリはバックシートがレザー貼りで、何ともいえない匂いが僕の胸を騒がせた。あの強烈な匂いを種々、トがレザリ貼りの待合い室にうつすのとたちこめていた。
四谷印刷の若社長が、「理事長の緒上先生にだけはごあいさつに行つときましよう」というので、僕は淡々つきあふ破目になった。詐欺師のアフターケアなんてのは、あまり聞いたこと

ホラだのぜだのといった部族だつてそうだ。いや、そもそもだ、俺とかお前とかいう区別だつて、戦争のために、お前と俺とか別々しやなぎやで、きんから。『俺』と『お前』が憎みあふから戦争が起こるんじゃない。戦争するために『俺』なんでもものは存在するんだ」「ごまごまや難しいこと言つてごまかすなよ」
ぼくはこの男のたわ言をさききるように大声を張り上げる。ソルを達成しようとステイックを一心不乱に巻いていたみんなの手が一瞬止まつて、その目がちやうとこちらに向ける。わかつてるよ、わかつてるぞ。だから、あんたが言つてゐるのは嘘の歴史をでっちあげて、

上・『毎日新聞』二〇二二年五月二十一日付朝刊
次頁右・伊藤計劃『The Indifference Engine』ハヤカワ文庫
次頁左・中島らも『永遠も半ばを過ぎて』文春文庫

そして、次の頁のものを含めて三点を比較してみてください。
ださい。

これは新聞の一般的な組版ですが、半角約物が連続しているところをよく観察してみてください。

「言葉の乱れ」を指摘する意見がありますが、未来永劫不変のものではないので、変化することとは本質的に当たり前なのです。組版もまた同じように絶えず変化しつづけています。

組版をめぐる意識もまた言葉と同じようにゆっくりと変化しつづけている
言葉はきわめてゆっくりとですが、絶えず変化しつづけています。